

日常と災害におけるケアのアナロジーの探究 —ケアの議論と言葉の手がかりをつくる—

Exploring Analogies in Concepts of Care from Everyday Life and Disasters: Enriching the Intersection of Care and Disaster Research

土田亮⁽¹⁾・藤井愛海⁽²⁾・頼政良太⁽³⁾・中野元太

Ryo TSUCHIDA⁽¹⁾, Megumi FUJII⁽²⁾, Ryota YORIMASA⁽³⁾ and Genta NAKANO

(1) 東京大学大学院総合文化研究科/独立行政法人日本学術振興会

(2) 日本赤十字豊田看護大学 看護学部

(3) 関西学院大学 人間福祉学部

(1) Graduate School of Arts and Science, The University of Tokyo
/Japan Society of Promoting for Science, Japan

(2) Faculty of Nursing, Japanese Red Cross Toyota College of Nursing, Japan

(3) School of Human Welfare Studies, Kwansai Gakuin University, Japan

Synopsis

This paper is an exploratory study that addresses long-neglected issues in disaster research, particularly the theoretical development of care studies, the analysis of their relationship with and beyond institutional frameworks, and the connections between individual concerns and the boundaries of social systems. It reviews existing debates on care within medical, nursing, and welfare studies, as well as feminist theory and the humanities and social sciences, and proposes conceptual pathways for linking these discussions to disaster research. This paper aims to identify and propose the multiplicity of care's ideals and practices as they emerge across a broad spectrum of contexts from everyday lives to moments of disaster. In particular, the paper seeks to reposition concepts that have often been overlooked, such as "goodness," "place," "voice/reality," and "self," within the framework of care studies, thereby opening new avenues for bridging disaster research and clinical practice.

キーワード: ケア, 日常, よさ, 場, 声と現実, セルフ

Keywords: care, everyday life, good, place, voice and reality, self

1. はじめに

近年, 災害の激甚化・頻発化や社会制度の揺らぎにより, 災害支援, 防災実践, 復興のあり方を再考する必要性が高まっている。また, 災害時のみならず, 日常生活に目を向けると, ケアの営みや関連する制度・関係性が形骸化し, その再編が余儀なくされている事態にも出くわす。こうした状況下で新たなケ

アらしさはいかにして構築されうるのか, あるいはそこにケアのネットワークの隙間に私たちが入り込めるような創造的なフィールドや見方, 書き方の可能性はあるのだろうか。本論考が提示したいのは, そうした緊急性を伴う課題に回答しつつ, しかしゆるやかに紡ぎ上げなければ壊れかねないような, 災害と日常のあらゆる場面・関係性・倫理的な臨み方などに潜むケアの行為や理念を捉え直すことである。

それは、精神科医で医療人類学者であるアーサー・クラインマンの次のような言葉から、災害の現場に立つ人びとにとっても助けること、守ること、防ぐことに対してハッとする共通性があるように著者らは思えるからである。

「私はケアする者であることを実践から学んだ。なぜなら、そうしないといけなかったからだ。そこになすべきことがあった。思うに、たいていの人はこのようにして（中略）ケアする者であることを学ぶのである」（Kleinman, 2009 : 293）。

本論考の目的は、日常から災害に至る多様な場面におけるケアの理念と実践を抽出し、その多元性を明らかにすることである。とりわけ本論考では、災害・復興時における「よさ」「場」「声・現実」「セルフ」といった、従来見過ごされがちだった概念をケア論と結びつけて再定位する。この文脈の再編を通して、フィールドにおいて人と対面し語り合う際の聴くこととすることを伴う臨床哲学(cf. 西村, 2023; 鷲田, 2015), あるいは、自明だった秩序や日常にひびが入り、従来通りの生活を続けることが困難になるような事態に目の当たりにしたり、生の脆さや過剰さが露わになったりする状況やフィールドに臨む営みとしての臨床(中村, 2024a)の実践と、災害研究を架橋しうるケアの議論と言葉の手がかりをつくることを目指す。

1.1 ケアの用語・射程の整理

本論考がまず念頭に置くケアとは、少なくとも三つの層で広く用いられていると整理できる。

第一に、ケアマネージャーやトラウマ・こころのケアなどにみられるような福祉政策・制度上の言語としてのケア(三井, 2018ほか)、第二に、ニーズや光が当てられてこなかった対象に対してフェミニズム思想、医療・看護学、人文社会科学を援用した学術的な捉え直しともいえる議論の蓄積としてのケア(ギリガン, 2022; トロント, 2024ほか)、第三に、カタカナで名指されずとも日常のふるまいとして根づく気配り・配慮・世話、また取り除くことが難しい苦悩に対して創造的に振る舞われる実践の総体としてのケア(浮ヶ谷, 2015ほか)である。これらは、2020年以降の新型コロナウイルス感染症の拡大を契機に、ケアワーカーや家庭生活と分業労働、バーンアウト、ケア領域の担い手不足などの社会問題をめぐる状況からも再考を迫られた。すなわち、水面下にあった接触や対面を通じた人の生に関わることの重要性、個や自由を重視する近代社会の中で周縁化されてきたケアの歪みが顕在化したといえる。

こうしたケアの諸行為は、養育、養老、介護などの社会化や贈与の現象などを通じた社会の網目のなか

で、誰もが他者に依存して生きていること、そして他者のニーズにいかに応答するかが問われるケアの倫理(ギリガン, 2022)は、いずれの層においても共通してまなざされる必要がある論点である。

また、日常や制度に目を向ければ、ケアはありふれた行為である。抽象的に言えば、それは、他者や対象への注意深い配慮と関与、関係性の中での調整や試行錯誤といった実践であり、また精神的・物理的な支援、対面・非対面の援助、家族や専門職などのアクターが担う公共・社会福祉的サービスなどを通じて、社会や秩序、関係性、労働を維持・再生産する営みである。さらに理念としてのケアは、他者やモノの存在を契機に自己を根源から見つめ返し、自他のあいだに生まれる行為を通じて創造的な共同性を立ち上げ、断片化したり個に閉じ込めたりしかねない世界を縫い繕う想像力を志向するものでもある。

ケアの営みは、その社会の歴史的な文脈、価値観、環境との関わりのなかで編み込まれていく。今一度立ち返ってケアを考えれば、そのように指し示すことはできるだろう。それとともに、ケアは誰もが使う言葉ではあるが、その意味の輪郭や射程は領域ごとに異なり、しばしば定義が曖昧なまま運用されている点に留意が必要である。

1.2 災害・復興時に立ち現れるケアの諸相

このように考えれば、災害・復興時に立ち現れるケア、あるいはケアかもしれない実践・理念の諸相は決して目新しいものではない。

例えば、ラファエル(1989)は、被災者が自分よりも大きな被害を受けた他者を救援し、被災者と救援者という二重の役割を担いながら相互に助け合う社会を「積極的感情にあふれた愛他的で治癒力のある社会」と呼んだ。また、ソルニット(2010)が「災害ユートピア(A Paradise Built in Hell)」として描いたように、困難な状況において被災者同士が互いのできることを持ち寄り、高揚感のなかで共同体や連帯感を形成する、一時的かつ泡沫的な相互扶助の現象も観察されてきた。さらに、グレーバー(2016)の「基盤的コミュニズム(baseline communism)」が示す、能力に応じて与え、必要に応じて受け取りながらも損得を計算しないという人間の根源的な原理は、災害時の相互扶助の場面にも通底している。こうした関係性は、ときに「まにあわせの共同体(rough and ready community)」として立ち現れる。

災害の倫理を論じたザック(2020)は、専門的であれ個人的であれ、他者から頼られる立場にある人は皆、その人びとが災害時に必要とするであろうことを把握し、スキルや強み、責任に応じて予測される緊急事態に対応する「道徳的責任(moral

responsibility) 」を負うと述べている。これらの議論は、災害・復興時のケアらしい行為や規範の一部として位置づけられるだろう。

より具体的な場面に目を向けるなら、エリクソンが調査したアメリカ・ウェストヴァージニア州の山間部にある炭鉱町バッファロー・クリークは、再読に値する事例である（エリクソン，2021；大門ら，2020）。この町にとってコミュニティとは、日常的なつながりと愛着に根ざしていた。そこには、古き良きキリスト教的な隣人愛に加え、同じ炭鉱会社で働くことによる仲間意識、家族同士の付き合いがあった。日常的には、道行く顔見知りにも声をかけ、食べ物や飲み物を分け合い、買い物の手伝いを任されるといった、ケアに満ちた営みが繰り返されていた。

しかし、異常な豪雨とばた山の決壊によってスラグを含んだ濁流が町を飲み込み、こうした日常の基盤そのものであったコミュニティが一瞬にして破壊された。その結果、コミュニティを基盤に生きてきた人びとは生きる意味を剥奪され、深い喪失感とともに「集合的トラウマ (collective trauma)」が生じた。このことに対して、単なる心のケアではなく、コミュニティや景観などの関係性そのものを立て直す「関係性のケア」が不可欠であるという指摘（成・牛島，2023；大門ら，2020）を裏づけるものであり、その必要性が身をもって理解される事例である。

日本では、ケアに内包される言葉やその言い換えは多様であり、その豊かさは災害時や復旧・復興の局面において胚胎するケアの契機を示す事例にも見出される。

三井は「ボランティアが被災者にとって、自らを気遣い寄り添おうとする他者として立ち現れたとき、被災者は自分が助けられる側でボランティアが助ける側という構図から一瞬抜け出て、このボランティアは何者でなぜきたのかという問いかけを発する」

（三井，2021：163）と指摘する。ここで描かれるのは、被災者が「助けられる側」という位置から一瞬抜け出し、ボランティアに「この人は何者で、なぜ来たのか」と問いかける場面である。こうした瞬間は、支援者と被支援者の非対称的な関係を揺さぶり、相互の立場や理解の枠組みを反転させ、ケアをめぐる相互性や他者性を孕む契機となる（cf. 内尾，2018；頼政，2024；鷺田，2014）。

また、板倉（2018）は、属性のみで弱者と判断される社会像に拘泥するのではなく、災害によって具体的な困難を抱えるすべての人びとがケアの対象となりうることを論じている。さらに、木村（2019）長期的なフィールドワークの視点からは、被災者が高齢化し、介護を受けながら生活を続ける移行期において、福祉社会が想定する担い手としての地域コミュ

ニティが十分に存在しない現実が浮かび上がる。そのなかで、イエの単位を基軸としながら、被災から生活再建、日常、さらには終末期に至るまで、地域・施設・家族・担い手を縫い合わせるように営まれる周縁的なケアの姿も見出される。

これらの部分的に響き合う議論から見えてくるのは、災害におけるケアの関係性や実践は、必ずしも一貫した理想化・理念化されたものばかりではなく、断片的でちぐはぐなものとして現れているという点である。このように人文社会科学の思想・哲学・実践から得られるケアに関するオルタナティブな議論や語彙は、批判的な議論も含め、災害・復興時におけるその特異性と普遍性を、日常との対比あるいはアナロジーのなかで考察する上で参照しうるものがある。災害研究において、ケアをめぐる人と人との萌芽的な関係が生まれては立ち消え、日常社会とは異なる様相を現しうる。それを記述しようとするところにこそ、本論考で災害と日常とケアを論じる意義がある。

1.3 問題意識とプロセス

しかし、災害時には、人・モノ・カネ・情報の流通など顕在化するダイナミクスや機能・技術の高度化が押し寄せ、ケアはしばしばささやかな行為や理念であるとして矮小化され、議論の後景に退けられてきた傾向にある。また、防災・避難・復興の枠組みに取り込まれる際にも、医療やメンタル・トラウマケア、個別の配慮など、システムや制度、相互行為の枠組みのなかで合理的・集合的に語られるにとどまることが多かった。そこでは、フェミニズムの視点や「誰が何を担うのか、依存しているのか」という問いが覆い隠されたり（cf. 山根・平山，2025；村上，2025ほか）、ケアがすべからず善いものやすべきこととして倫理や規範が無批判に回収されたりする傾向があった（Stevenson, 2014）。

この結果、復興のなかにおいて、また新たな日常に向かう現場において見出しうる論点が見過ごされてきた。例えば、ケアそれ自体が不安定ななかでの整っていく、あるいは立ち行かない現実のなかでどうにか繋ぎ留めようとするよさの過程、ケアによって立ち上がる現実と声、個別の心配と係わり合いを支える場、社会制度との境界面の隙間に置かれてしまう自立しているかどうかとも判別しがたい個人とその自己に対する意思決定などがありうる。それらは復興や日常での現場の事例はありふれているが、問題の手前で止まってしまい、その思考の基盤に十分な関心が払われてこなかった。

本論考は、このような問題意識に立ち、既存のケア論やフェミニズム思想、医療・看護・社会福祉学・人文社会科学における言葉と議論を展望し、それら

を災害研究に接続するための手がかりを示す試論である。本論考の執筆者4名は、令和7年度京都大学防災研究所共同研究萌芽的研究として採択された「日常と災害のあいだにおけるケアの理念と実践に関する多元性の探求」にもとづき発足した「日常と災害とケア研究会」に所属する若手・アーリーキャリアの研究／実践者である。2024年4月から2025年3月にかけて計6回のオンラインおよび対面での研究会を開催し、問題意識を共有しつつ議論を重ねてきた。

参加者の専門は、災害研究を基軸に、人類学、看護学、防災心理学、グループ・ダイナミクスなど多岐にわたる。現実や他者、他なるモノたちが相互に構成される関係論的なケアの様相を、制度化されたケア論に収まりきれないそれぞれの方法論と現場経験にもとづいて記述・分析する。ここで抽出された知見は、直近の喫緊の課題である能登半島複合災害や九州豪雨に限らず、過去および将来の災害における多様なケアのあり方、制度化されない実践・関係性の基盤を構想するための手がかりとなるだろう。

2. ケア論と災害研究の接続可能性

各論者による事例を示す前に、まず医療・哲学・思想などの領域においてケアがどのように展開されてきたのか、そして本論考における暫定的なケアの定義を明らかにしておく必要がある。もちろん、ケア論の全容を紹介し批判的に検討することは、本論考の分量や筆者らの力量を超える。ここでは、本論考の展開に資する主要な論者とその議論を、要約を兼ねて紹介しつつ、近年のケア論がいかに災害研究にアナロジーとして接続しうるかを探る。

ケアとは何かを直接問うよりも、むしろケアが必要とされる場面・状況・対象とは何かと視点を変えて考えることが有効であろう。例えば、自律的な主体＝個人＝身体＝人格が何らかの形で損なわれたり欠乏したりしたとき、そのニーズに応じて居合わせた人びとが「何をすべきか」という道徳を経験的に、ときに戸惑いを含む倫理を伴いながら判断し(伊藤, 2020)、その正当性が交渉や承認を経てサービスや配慮として提示される行為。あるいは、私たちが傷つきやすい存在であると同時に傷つける存在でもあり、ケアをする側であると同時に受け取る側でもある、その生の不安定さゆえに生じる両義的な関係性。ケアはそのように人と人との関係のあり方をめぐると一つの形式として理解されうる。

2.1 更新されるケア論

ただし、上記の関係性のあり方をめぐっては、ジェンダー、専門性、権力関係など多様な論点が論じ

られてきた。またケアという言葉自体も、視点や実践の細部に応じて多様なヴァリエーションを持つ。ケアの社会学を著した上野(2011)はケアの概念や定義自体にはそれほど意味はなく、むしろケアおよびケアワークの概念が文脈依存的であるからこそ、いかなる文脈の行為がケアたるものになるのかを見ていくことが重要であると指摘している。本章でも、ケアの全容を網羅することはせず、3章以降の議論に接続するために、近年の新たなケア論の主要な論点をいくつか抽出して整理する。

まず代表的なものとしてあげられるのは、フェミニスト政治学者ジョアン・トロントである。彼女によればケアとは「私たちがこの世界で、できるかぎり善く生きるために、この『世界』を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべての活動を含んでいる」(トロント, 2024: 113)。そのプロセスには、人に関心を向け、配慮すること、その上での具体的な労働とその応答までもが射程に入る。トロントは、ケアにはあらゆることが含まれるのであり、ケアの概念を弱者のケアに押し込める見方にこそ、ケアが軽視された価値観が反映されている。人間社会の維持にはケアが不可欠であり、なによりも私たち自身が例外なく「ケアされる」存在であることを提示する。

また、トロントは、ケアが社会的・政治的に機能する営みであることを強調しつつ、その活動の大部分は文化的に定義され、文化によって異なると述べる。そして、ケアを「する者／される者」の二者関係に限定する発想や、女性や母親のような特定の属性がより強いケア能力を持つとする発想を退ける。さらに、ケアには「気にかける(care about)」や「引き受ける(take care of)」といった倫理的・情動的な次元が含まれ、それらが維持労働や具体的な実践と結びつくことで現実化することを示した。

医療人類学者・経験哲学者のアネマリー・モルは、オランダの病院において糖尿病患者とそれを取り巻く人・モノ・環境の関係性を詳細に観察してきた。モルの言葉を借りれば、ケアの目標とは「どうすればよりよく生きられるのかを探求することは、ちょうど糖尿病と同じように、慢性的なものだ」(モル, 2020: 102)という点にある。ここでいう「慢性的」とは、健康を完全に回復する見込みがない病にあって探究には終わりがなく、善い生のためにできることが無数に存在することを意味する。ただし、病んだ身体は予測不能であり、尽力してもうまくいかないことも少なくない。したがって、ケアは明確な成果物ではなく、何が成果とされるか自体もあらかじめ定まってははいない。

さらにモルは、西洋思想における常套句である「自

己決定」を理想とする近代的倫理や、自律した個人という前提を拒否する。その代わりに、ケアをモノや技術、関係性や環境など非人間的アクターを含む複雑な絡まり合いの中に見出し、そこにおいてケアは反復性をもち、過去や未来に依拠しながら試行錯誤と調整を繰り返す過程であることを強調する。

トロントもモルも共通して、ケアとは私たちが善い生を追求するために行うすべての営みを含むと論じる。重要なのは、その営みが制度や手続きによってあらかじめ規定されているのではなく、具体的な生の善さを目標とし、かつその善さは一般化された規範や道徳によって外部から与えられるのではなく、行為の積み重ねを通して実現される点にある。

モルやトロントの枠組みが制度や規範の外でケアを捉えようとするのに対し、スティーブンソンは現実を通じてその実践的・倫理的な次元をイメージからさらに浮かび上がらせる。Stevenson (2014) はカナダ北部のイヌイト社会におけるアルコールや麻薬依存、自殺の増加や深刻化を背景に、ホットライン活動などにもかかわりながら、若者たちのあいだで調査を行った。先住民であるがゆえに彼ら彼女らは国民化政策や医療サービスによって優遇されるが対象化され、その生死が数値として把握される状況のなかにあった。スティーブンソンはそのなかに濃密にとどまっているままならないケアや日常の苦悩に着目した。

彼女は、事実が曖昧になる瞬間や躊躇いの瞬間の経験を尊重すること、対象を固定化して「何者か」としてみなすのではなく、伴侶 (companion) として想起すること、といった「ケアするように書く」という観点を提示する。彼女が見出すのは「ただ声を聞く存在」を許容し寄り添う (attend) あり方としてのケア、ならびにその見方・書き方である。このようにスティーブンソンは生活の流れのなかで時に倒錯したかたちで現れる心配や係わり合いの諸相を、複雑なまま視野に入れてみる。このことを通してケアや愛の意味するところをお馴染みの連想からずらそうと彼女は試みている。

実践への見方やかかわり方としてのケアもいくつかある。Thelen (2015) は、ケアの実践はさまざまな行動領域において諸関係を構築あるいは解体する活力をもつとし、既存の関係性の枠組みからではなく、実際に語られ、行われている実践そのものを中心に据えて議論すべきだと主張する。ケア実践やその変化を観察することで、ケア概念は予期せぬ帰結を示すことがある。森 (2019) もまた、ケアを人・モノ・制度・経験との関係性の中で協働的に構築される相互行為の過程として捉え、非対称性を前提としながらも社会との境界面を動的に作り変える営みとして

位置づける。このようなケアの実践は隣接するもの同士を包含し、場所に動機づけられた共同性はコミュニケーションをとおして領域の外にも開かれていく。

2.2 本論考が見据える日常と災害におけるケアのアナロジー

これらの議論は、ケアを制度や権力の外部に位置づけるのではなく、むしろ世界を縫い直す営みの一部として理解する想像力を喚起する (cf. 西ら, 2025)。こうした雑駁な定義の列挙であっても、災害研究に直結する要素は少なくない。責任、倫理、実践、時間、試行錯誤、関係性、場所、制度、予測不可能性などといった概念は、いずれも災害研究において繰り返し扱われてきた範疇であり、ケアとのアナロジーとして何らかの形で接続可能でもあるだろう。

ただし、医療と災害の類似点とともにその性質としての相違にも留意すべきである。例えば、前述したモルが疾病におけるケアを「慢性的」と表現した点には留保が必要なかもしれない。そこでライマン (2024) は、「慢性」という語が「永続する・一生消えない」と誤解される危険性を指摘し、代わりに「持続痛」という表現を提案している。また、モルの慢性概念やケア理解に対して、中村 (2025) は、スティーブンソンが呼ぶ「ある種のバイタリズム」と結びつくケアとの関連を指摘し、モルのケア論を批判的に退ける。モルは提示するのは、患者がよりよい状態をまっすぐに欲し、ケアに携わる人びとがそれを知り、応答して挑戦し続けるというバイタリズムである。他方で、中村とスティーブンソンが描き出すのは、生の過剰さに付きまといながらも、ただ傍らにることしかできなかった経験であった (cf. 中村, 2024b)。この対比は、ケアにおける善さとは単にその実体が不明確であるだけでなく、それを欲すること自体があらかじめ所与のものではないことを示している。

このように疾病と災害とを重ね合わせると、ケアに織り込まれている時間性や関わり方について、少なくとも2つのポイントが浮かび上がる。

第一に、時間と目標である。これは宮本 (2015) が提示する「めざす」と「すごす」ことのかかわりにヒントがある。復興支援においては、被災者に寄り添うことやただ傍らにることというように、現在に向けられた実践が志向されることが多い。宮本は、災害により大きな喪失を経験した人が、未来に向けられた実践に困難を覚えるとき、外部支援者が相手のかけがえのなさを重視し、現在に向けられた実践を行うことの重要性を指摘する。そして、これを保育の臨床コミュニケーション論において提起された

「めざす」かわりと「すごす」かわりという関わり方として整理する。この対比のポイントは、「すごす」かわりは変わらなくてよいことを前提としているが、当事者がすでにもっている力を肯定することで結果的に「めざす」かわりにつなげようというもので、問題含みの現状を単に肯定するものではない、ということである。そのように考えれば、災害や日常のなかにあるケアの志向性とはいかなるものか、いかにありうるのかという点はよさや視点、場、関係性などあらゆる観点から考察することができる。

第二に、断続性と不確定性である。この例として、近年日本の災害研究において注目されている「災間」がある。仁平(2012)は東日本大震災後の論考において「災間」を提唱し、災害を例外的な出来事ではなく、常に繰り返し襲ってくるものと捉える視点を提示した。平時とされる時間もまた、実際には絶えず災厄のあいだにあるという理解である。そうした時間のなかで、もっとも困難な状況に追い込まれるのは、平時からすでに困難な立場にある人びとや地域であると指摘した。そして、そのような人びとを平時から支える社会のあり方、すなわち災害への向き合い方そのものを転換する必要があると説く。換言すれば、既存の災害管理サイクルの枠組みや制度支援は、災害を一度きりの完結した出来事として扱う傾向が強く、災害の多重性やそれに伴う困難を十分に捉えることができないという限界を抱えており、なおかつ、災間という視点が災害の後を問うのではなく、災害と災害のあいだ、あるいは災害がもたらす連続的なプロセスや私たちの日常そのものを問題の前景に引き出す、ということにつながる(宮本, 2024)。

こうした議論から見出せるのは、ケアを単なる持続や過程、回復、さらには制度論へと還元するのではなく、制度の外部においても、なだらかによりよい状態を目指す視点の重要性である。そこには、状況を何度でも手直ししていじくってみる(tinkering)(モル, 2020)という、懸命で能動的な「する」ことの志向性だけでなく、あえて正面から問題に対処しようとすることを回避し、すり抜ける(passing)(西川, 2007)というあり方をも含んだ、ケアの雑多さと内在的な倫理もありうる。すなわち、ケアには、積極的に介入する「する」ことと、状況を成り行きに任せるとして受け止める「ゆだねる」ことの双方が交錯しており、そのあいだにこそ人間的な応答の豊かさが宿ることを忘れてはならない。

中村(2025)はこのようなケアにおける「する」と「ゆだねる」ことの相違がもたらす豊かさを指摘している。一方で、「する」に照準を合わせたケアは、多様なアクターの存在を同定し、何がなされて

いるか／なされるべきかに注目することで、協働に向けてさまざまなアクターやその営みを動員することを可能にする。他方で、問題に直面する当事者が／に対して何かを「する」でもなく、むしろ問題となる事態からすり抜け、状況や人の生が展開するままに「ゆだねる」軽やかさは、「する」という行為や言葉だけでは掬い取れない。中村は、心配や係わり合いの生まれる場における「ゆだねる」こと、つまり、状況や生がおのずから展開するままにゆだねることは、ケアが必要な場面において誰かが何かをしてくれることを期待し、じっと待ち構える態度ではなく、状況を統べることができない自分が無力ではないのだと、あるままに受容する態度を強調する。

これらの議論を踏まえ、本論考におけるケアの暫定的な定義として、生の不安定さを前提に、人と人、そして人とモノ・環境の関係性の中で生じる応答的かつ持続的な実践と倫理とする。それは固定的な概念としてではなく、与える者と与えられる者という非対称な構図にとどまらず、相互の変容や反転を伴いながら場を生成し、よりよさをはじめから把持せず、当人にとってのよさの方向を模索し続ける過程を含んだ営みや態度である。そして、災害研究においては、カタストロフィや災間、終わりの見えない復興のただなかで、人びとが自らの生や日常を意味づけ、確かめ合う関係性も含めて理解できる。

このように捉えると、ケア論と災害研究の接続可能性がいくつか浮かび上がってくる。例えば、震災後の生きがいを考察してきた望月(近刊)は、三井(2018)やギリガン(2022)の議論を踏まえ、人びとが直面する問題が必ずしも解決を目指されるとは限らないこと、また問題を抱える人びとの傍らに寄り添い、その問題についてともに悩み続ける姿勢にケアを見出す。そして、生きがいの喪失や心の問題といった災害に伴う私的な課題を下支えするケアの共同性の萌芽を描こうとする。こうした自明であったケアの秩序や日常にひびが入り、従来の生活を維持することも困難なる状況下で、人びとは復興または災間のなかでの生の脆さや過剰さに向き合いながら、ケアはいかなる様態であり、またありうるのか。これらの問いの実態について、一見ありふれた復興の日常や実践からより仔細に明らかにする必要がある。

3. 事例検討

以上のようなケアの議論は、復興のよさをめぐる探究、ケアが動き出す場、主体の見方、制度外の実践といった論点と、災害研究の関心を部分的に喚起させ、交差させ、逡巡させる。取るに足らないとされがちな領域であっても、福祉国家・社会や制度の網目

から漏れ、あるいはそれらが十分に機能しなくなった被災地においては、ケアの担い手の力もままならず、与え手も受け手も、内部も外部もまたそれらが出会う場も混在しながら、不十分なりに形成されていくケアの姿が見えてくる。

災害によって社会が不安定であるからこそ、それは希望とも絶望ともどっちつかずな関係性として立ち現れる (cf. 木村, 2019)。例えば、避難所での雑務やなにげない会話や復旧や復興のなかで用いられる人同士だけでなく、人とモノなどのあいだに現れるケアの契機、人と人との関係や時間、オルタナティブから生まれるケアとしての避難 (松田, 近刊) といった、微細な視座を取りこぼしてはならない。また、既存の関係性や実践を安易にケアと呼び換えたり、それに含意される意味に還元したりして説明や解決を試みることも避けなければならない。その意味で、災害研究で用いられてきた既存の概念や関係性、見方をどのように別様に構想し、あるいは豊かにしうるのかについて、いっそう注意深い検討が求められるだろう。

以降の章では、各論者が自身のフィールドや実践を通して、ケアの関わり方、見方、場、制度外の実践、モノや環境の配置といった多様な側面を取り上げる。複数の事例を通じて、日常と災害のケアのアナロジーや捉え方を豊かに描き出すことを目指す。なお、以下の各事例の章は、各論者の論文をもとに抜粋・加筆修正したものであるため、議論の詳細に立ち入る場合は原論文を参照されたい。

3.1 よさが見出せない復興

土田 (2024) は、復旧・復興が停滞する中での災害ボランティア活動、とりわけ瓦礫の撤去やごみの処分において、被災者の生活感が過剰に滲み出るモノを捨てることへのためらいを経験したことを告白し記述した。他者の所有物を捨てる行為は、被災後であれ日常であれ、程度の差こそあれ抵抗や忌避を伴う。しかし被災後の復旧復興の過程は、元の生活空間が計り知れないほど変容するなかで、使い物にならなくなり不要と判断されたモノや保存する空間の制限やどれくらい生きていられるかという葛藤の末に捨てようかと判断されたモノが乱雑に並べられる光景が眼前に広がっていた。

その場に立ち支援する者は、それらが喚起する人格的な記憶や生活の質感に如実に触れざるを得ない。このためらいは、長年緊急支援の場で活動してきたベテランの年配スタッフや、現地に派遣活動拠点を置き長期活動していた女子大学生ボランティアスタッフにも共有され、彼ら彼女らもモノや家の持ち主に対する覚悟や尊厳を垣間見たこと、また処分の介

助を自らの手では行いたくないことを口にしていた。

こうした経験は、支援や制度的介入の前に、被災地や被災者にとってよりよい災害復興とは何かという一般化されたり一貫したりした理念や教訓を一旦留保する必要性を示す。モノの存在が何らかの関係性を喚起し、先の見えない復興を目指すコミュニティにおけるケアの方向性を指し示すのであれば、他者や異なる存在との関係の網目を漸進的につなぎ合わせ、状況に応じて生活の個別性や具体性に寄り添いながら、復興の方向性を共同的に繰り返し探求・実践していく記述が求められる。

このようなよさの解釈を広げる準備として、アネマリー・モルが提示する「選択のロジック」と「ケアのロジック」(モル, 2020)を概観する。ここでいうロジックとは、ローカルで多様な実践から浮かび上がる一定の共同性や態度を指す。

選択のロジックとは、個人が固有の意思と欲望をもち、ある瞬間に選択したことの結果を自らの責任として引き受けるという考え方である。医療の文脈では、インフォームド・コンセントや妊娠中絶などがわかりやすい例である。専門家が情報を提供し、患者が自由に選択するが、その結果の責任は患者個人が負う。この選択は直線的な時間軸で進み、そのなかで当人は生きていく。私たちは、自律的な個人、あるいは市民のなかの消費者として選択の自由を称賛し、その責任を個人に負わせる社会で生きてきたといえる。

しかし、このロジックにもとづき責任や判断を個人に帰し続ける状況では、善く生きることの限界も見える。不確実性や曖昧性、予測不可能性が高い状況では、自己決定や近代的倫理、専門的判断によっても、当人やケアする人にとって現実的な解決は困難である。災害の文脈では、避難か仮設住宅か現地再建か、移動するか留まるか、さらには災害リスクの高い場所に住み続けるかといった選択と責任がこれに含まれる。

一方、ケアのロジックとは、個人的困難を抱える人の状況を改善し、悪化を防ぐため、生活の個別性や具体性に寄り添いながら持続的な調整を伴う実践である。選択のロジックが単一のプロセスで分岐点を形成し責任を本人に負わせるのに対し、ケアのロジックは、状況改善のための試行錯誤を反復し、日常的に工夫や失敗を含めた調整に取り組む態度を指す。そこでは、個人の困難さに配慮しつつ、相互扶助的な関係のもと集合的に善い生活を求める実践が不可欠となる。さらに、人以外の存在としての非人間、道具や技術などを含むモノ、制度、人とモノのネットワークを更新し続けることが重視される。

モル (2020) は、本人がどのような状況で誰と生活

し、どんな問題に直面しており、どのような人的・技術的資源が利用可能か、それを使って何を選び得るかといった具体性を理解することがよさ（good）だと指摘する。この考えを踏まえ、土田（2024）は、災害復興におけるケアとは、解があらかじめ与えられていない状況であっても、被災者とその家族、ボランティア、瓦礫やニーズシートなどの人工物を含む多様なアクターが集合的に関わり合い、よりよいケアや復興を形づくろうとする視点が重要であると述べる。

よりよいという規範的な価値は、決して固定的ではなく、誰にも何にも完全には把握されていない。だからこそ、防災・減災・復興・コミュニティ・計画といった領域では、すべきという規範から発想するのではなく、具体的な対象や存在への気配りと配慮を出発点に、その状況におけるケアのよさを都度方向づけることが求められる。災害研究において、創造的に関係を継ぎ合わせながら形成されるケアを理解するには、被災地に身を置く人びととモノが相互に働きかける関係論的な視座が不可欠であろう。

3.2 ベースの支援と場

災害時には、多くのNPO団体による支援が欠かせなくなり、それらの団体が提供する専門的な支援は、被災者支援において重要な要素となっている。しかし、大規模な災害が発生した際には、専門的な支援をおこなう団体だけでは被災者の支援に十分な支援を提供できない。さらに、被災者の抱えるニーズは目に見える表面的なお困りごとだけではなく、被災者に寄り添いケアをする活動も必要である。

三井（2018）は、ケアにかかわる支援を従来型専門職による支援と専門職のケア、ベースの支援の三つに分類している。専門職による支援は、相手が何を必要としているかを判断し必要なものを提供するものである。従来型の専門職は、病気それ自体を治癒することが目的であった。しかし、専門職といえども、相手との共通の目標を設定したり、相手が参加できる環境を整えたりして、患者が治療に参加することが重要視されてきている。専門職のケアは、相手との協働作業を重視し「生活の質」を向上させることが重要だとされている。それらに対して、ベースの支援とはその専門職の支援の「前」と「後」の日常にかかわり、相手を支えるものである。例えば、病院に行くためには、いまの自分の状態をある程度把握し、かつどのような病院が自分に適切なのかを判断し、病院まで通うための手段を有している必要がある。また、治療が終わった後の生活に不安を抱える人たちもいるだろう。日常に強固な基盤がないために専門職による支援が必要となった人からすれば、

治療が終わった後の日常にこそ不安な要素があることは想像に難くない。これらの支援の前後にある生活を支えるのがベースの支援である。

ベースの支援によって日常生活での人間関係が豊かになることで、専門職の支援がなくても生活が改善できる可能性もある。例えば、社会的処方と呼ばれ、孤立した人を支えるリンクワーカーは、そうした典型例であるだろう（西ら、2020）。リンクワーカーとは、社会とのつながりをつくる人たちのことであり、社会的なつながりを構成することによって、病気自体にはアプローチしなくとも、対象となる人たちが豊かな生活を送ることができる環境を作り出すお手伝いをしている。災害時における被災者支援においても、単に災害によって生じた課題を解決するというだけではなく、多様なつながりを作り出すことや、外部支援者との出会いをきっかけに自分たちの地域の捉え方を変えていくことで、生活が改善することなどが指摘されている。例えば、専門家ではない外部支援者である大学生が被災地に入ってきたことによって、被災者が地域の捉え方を変えるケースなどがある（阿部、2014）。

このように災害時にもベースの支援は重要な役割を果たしうる可能性がある。しかし、突然ケアが必要になる災害時には、持続的な関わりを前提とするベースの支援を実現するのは簡単ではない。2019年、2021年の佐賀豪雨災害で被災した「一般社団法人おもやい」（以下、おもやい）の活動では、多様な人々を巻き込む「場」を形成することでベースの支援を実現している（頼政、2023）。「おもやい」は、計画をあえて作らず関わりを持った人たちのできること、やりたいことを集める形で運営されている。例えば、「おもやい」が家の片付けを手伝っていたある女性は家が一部壊れており経済的に修繕が難しい状況で「おもやい」が家の片付けを支援していた。活動中にその女性が子どもに勉強を教えるのが得意であるということがわかり、子どもたちに勉強を教えるボランティアとして参加してもらおうように提案をしたところ、活動に積極的に参加してもらえるようになった。このことがきっかけで、新たに子どもたちへの勉強を教える寺子屋という活動が始まることにつながった。このように、「おもやい」では、かかわった人たちを単に被支援者としてみるのではなく、「おもやい」という〈場〉に参加している一人の主体者であると捉えることで、その人の「想い」を引き出していくというあり方が取られ、その「想い」を周りがサポートしていくことで、多様な活動を生み出し、その人自身のケアにもつながっている。

三井は〈場〉について、「現場の人たちが確かにそこに「ある」と思っているもの（中略）〈場〉としか

呼びようがないような、それでも確かに存在すると感じられているような、さまざまなモノや複数の主体が織りなす関係性(三井, 2021: 97)」という。「おもやい」という〈場〉も当事者たちがそこにあると感じており、その〈場〉によって多様な関係性が育まれているという点が共通している。災害時においても「おもやい」のように被災者を含め、誰もが参画でき、誰もが主体となれる〈場〉を構築することによって、ケアにおけるベースの支援を実現することが可能となるのである。

3.3 多声的・多角的現実

ケアの実践はどのように構想され、記述され、そして評価されるべきだろうか。まず、ケアの実践の占有という問いから、議論を始めてみたい。文化人類学の有名な批判の一つに、ジェームズ・クリフォードら(1996)の『文化を書く』がある。文化人類学者のエスノグラフィは、研究対象者の行為・行動を客観的に記述したものになり得ず、あくまでも研究者によるシングル・ボイス(単声的)かつ、シングル・アングル(一つの見方)に過ぎない。この批判を出発点に、文化人類学においては、研究者が一方的に記述を占有するのではなく、研究対象者も記述に参加したり研究者の記述を研究対象者が解釈したりする様々な手法が提案されてきた。

この視点に立ってケアの実践を見つめれば、同じような構図が現れてはこないだろうか。すなわち、どのようなケアが必要であるかといったケアの受け手に対する見方がケア提供者(実践研究者)の単声的かつ一つの見方で決定され、ケアの一連の過程がケア提供者の側によって占有されてしまい、ケアの受け手がケアの実践に参加できない状況である。つまり、ケアの実践のためにケアの受け手の多くの声(マルチ・ボイス, 多声)を聞いて、多角的な見方(マルチ・アングル)でケアを構想、記述し、評価すべきと考えるが、これもそう単純な話ではない。よく陥りがちな過ちとして、ケアの受け手にヒアリングを行うことが考えられるが、そもそもケアの受け手の多声性を、ケア提供者が解釈するという行為によって単声的かつ一つの見方に矮小化してしまうからであって、結局はジェームズ・クリフォードの批判の内に留まってしまう。

では、真に多声的かつ多角的なケアの実践とはどのようなことを指しているのだろうか。このことへの理解は芥川龍之介の小説『藪の中』を映画化した黒澤明監督の『羅生門』を題材とした「羅生門的現実」が参考になる。この映画の詳細なストーリーは割愛するが、一人の武士の死をめぐる4人の当事者の語りを中心に展開され、それぞれの証言が、まったく異

なるようにも見えるが、そもそも客観的な一つの事実というものは存在せず、その証言は一つの出来事に対する当事者のそれぞれの現実・見方を表している。

それでは、ケア提供者やケアの受け手が関わるケア実践において、それぞれの多声的・多角的現実を踏まえながら、それぞれがケアの実践に十全に参加・関与しながら、ケア実践を進めていくにはどうすればよいだろうか。その糸口となるのが、中野・矢守(2021)の実践である。中野・矢守(2021)は、メキシコで行った地域防災実践に直接的にかかわってきた研究者、市役所職員、外部コンサルタント、政府職員という4人の当事者の多声的・多角的な地域防災実践に対する現実を、ビジュアル・エスノグラフィ手法を用いて表現している。

具体的には、研究者がメキシコでの地域防災実践を約3年にわたって映像記録し、編集したビジュアル・エスノグラフィを制作し、そのビジュアル・エスノグラフィを市役所職員、外部コンサルタント、政府職員とともに視聴し、その映像に対する反応・意見をコメント動画として収録、ビジュアル・エスノグラフィ(すなわち研究者の見方)と、コメント動画(市役所職員、外部コンサルタント、政府職員それぞれの見方)によって表現されるそれぞれの現実を「時間的前提」「空間的前提」「関係性の視点」「活動の評価」といった切り口で表現したものである。すなわち、研究者、市役所職員、外部コンサルタント、政府職員それぞれの、一つの防災実践に対する多声的・多角的現実が併存することを可視化し、それぞれが「羅生門的現実」を踏まえながら次の防災実践を構想することができる。ケアの実践においても、それぞれのケアにかかわる人々の多声的・多角的現実を踏まえて実践を構想することを通して、多様な現実が交錯し、重なり合うプロセスの中でケア実践が生成され、心地よいケアの世界が実現できるのではないだろうか。

3.4 セルフケア

災害がもたらす影響は建物やインフラの損壊といった物理的な被害にとどまらず、地域住民の生活基盤を脅かし、身体的・精神的健康にも深刻な影響を及ぼす。特に避難生活の長期化やライフラインの断絶、医療資源の制限といった環境下では、慢性疾患の悪化、感染症の流行、精神的ストレス、社会的孤立など、複雑かつ多様な健康課題が顕在化することが知られている。

このような状況において、看護職は医療支援の担い手として機能するだけでなく、人々の不安や苦痛に寄り添い、生活と心を支える存在として重要な役

割を担っている。看護実践は処置や技術的援助といった治療的行為にとどまらず、「ケア」を通じて人間の尊厳を守り、回復への歩みを支援する営みである。看護の本質は、まさにこの「ケア (Caring)」という関係性の中に見出される。

ジーン・ワトソン (Jean Watson) (2014) は、看護を信頼と共感に基づく人間関係を通して、癒しと意味をもたらすケアの科学であるとし、看護を人間の存在そのものを尊重する行為であると定義している。彼女のケアリング理論は、身体的ケアに加えて、精神的、存在論的、倫理的な側面を重視しており、災害時においても極めて有効な視座を提供する。例えば、避難所で不安や孤独を抱える高齢者に対し、看護職が単に服薬指導を行うのではなく、共に時間を過ごし、思いに耳を傾けるといった関わりは、心理的安定や自尊感情の維持につながる。これは、看護が行為としての支援にとどまらず、関係性を介した支えであることを示している。

また、マデレイン・レイニンガー (Madeleine Leininger) の文化ケア理論 (1995) では、看護を文化的価値や信念、生活様式を尊重したケアの提供であると主張し、対象者の文化的背景を理解することが、真に意味あるケアにつながると述べている。災害時には、異なる文化的背景や生活習慣を有する人々が一時的に共に生活する避難所という特殊な環境が生まれる。こうした状況下では、食事の嗜好、宗教的行為、生活習慣などへの文化的感受性がケアの質に大きく影響する。文化的多様性に配慮した看護実践は、単に快適性を担保するだけでなく、被災者の尊厳を守る基盤となる。

さらに、ドロセア・オレム (Dorothea Orem) のセルフケア理論 (2005) では、看護は、対象者のセルフケア能力を支援し、セルフケア不足を補うことを目的とした援助的行為とされる。災害時には、環境変化により、日常的に行っていた健康管理や生活行動が困難となりやすい。例えば、糖尿病や高血圧など慢性疾患を有する人が、薬の服用を忘れていたり、食事療法を継続できなくなったりするケースは少なくない。このような状況において、看護職が個々の健康課題を評価し、災害状況に適応したセルフケア行動の再構築を支援することは、疾病の重篤化を防ぎ、健康維持につながる重要な支援である。加えて、平時から自身の身体や生活に対する理解を深め、セルフケア能力を高めておくことは、災害時における「自助」の基盤となるとともに、健康リテラシーの涵養にも寄与する。

こうした視点に立脚し、西川・野嶋は糖尿病患者の災害時セルフケアを支援するための「災害手帳」を開発した (西川・野嶋, 2016)。この手帳は書き込

み式であり、平常時の備えから非常時の対応まで一貫して活用できるように設計されている。自身の身体状態、服薬、食事内容などを可視化し、必要な行動へとつなげる構造は、自己認識と実践の解離を埋め、専門職との協働を促進するツールともなり得る。これは、災害時においても看護が対象者の力を引き出し、共に健康をつくる実践であることを象徴している。

災害という状況において、「ケア」は制度的支援の隙間に生まれる実践であり、被災者同士の相互扶助や専門職の支援行為の中に多層的かつ動的に存在する。ここでは、看護学の視点から災害時のケアに焦点を当て、ワトソン、レイニンガー、オレムらの看護理論を援用しながら、ケアの理念と実践の輪郭を検討した。これらの理論は、災害時におけるケアを感情的共鳴、文化的尊重、自己管理の促進といった多様な軸から捉え直すための理論的足場を提供している。特筆すべきは、看護ケアが「対象者のために何かをしてあげる」という一方向的な支援にとどまらず、相互性や関係性を基盤とし、対象者の能動性を引き出す営みである点である。災害時においても、被災者が自らの身体や生活への理解を深め、自己決定を支える支援は、尊厳を支えるケアとして極めて意義深い。

さらに、災害時に可視化される自発的なケアや支援ネットワークは、制度的枠組みを超えて生成される「制度外のケア」であり、日常の延長線上にある実践とも捉えられる。したがって、災害ケアを制度や役割の枠内だけで捉えるのではなく、その生成的・関係的な性質を多角的に理解する必要がある。今後は、看護職を含む災害支援者が、平時からケアの多義性と複層性を理解し、文化的・社会的文脈に根ざした柔軟かつ創造的な支援を展開できるよう、実践と理論の往還を促進していくことが求められる。

4. おわりに

本論考では、「日常と災害とケア研究会」における理論的・実践的議論を基盤に、災害と日常におけるケアの諸実践を多面的に考察してきた。これらの議論は、災害後の支援現場に深く根ざした調整と関与の営みを照射し、単線的な復興や制度的支援の枠組みでは捉えきれない、複雑で関係的なケアの実態を浮かび上がらせた。

とりわけ複数の災害時のフィールドや事例を通して本論考で提示したかった重要なことは、ケアの概念が制度や専門職、また、する／されるといった既存の枠組みを留保し、ケアの場を生成し、関係を構築し、さらに実践者としての自己認識の変容を促す

契機となっている、ということである。被災者・支援者・研究者といった役割の固定化を超え、ともにあることやともに不安定であることそのものを問い直す感性や視座として、ケアは絶えず再定位される必要がある。

今後の課題として、こうしたケアの概念をいかにして災害政策・教育・現場実践と接続していくかが問われる。また、評価が困難で制度化されにくいケアの営みを、どのように記述し、共有し、持続可能にしていくかも大きな課題である。例えば、被災者であり同時に内部支援者でもある人びとにおいて自と他の双方へのケアはいかに立ち現れるのか（cf. Azuma, 2025; 大門・渥美, 2018ほか）、災害・復興・災間において人びと・社会・技術を繕うケアとはどのようなものか、避難から復興、さらには日常へと移行する時間のなかで、いかなるケアの萌芽が見出されるのか、ケアの関係性において生まれる協働的で中動態のようにもみえる主体とはいかなるものか、それはどのようにして現れ、記述することができるのか。他者と自己の苦しみをいかに分有し合うのか。ケアの行為者の適切な意図が本当に適切であるのか、そうしたなかでよさが見出せない、あるいは脆く崩れてしまう場面、すり抜けてしまう局面においてケアは誰に・何に応答するのか。断片的であるが、これらは経験的にわかるものの、依然として残された災害研究の側から応答する必要がある問いである。

本論考ではこれらの課題に十分に踏み込むには至らなかったが、災害研究におけるケアの領域と語彙を豊かにする試みを行った。ここでの議論と言葉を契機に、災害と日常の交錯する状況におけるケアの可能性を再考し、制度の枠外にある営みの価値に光が当てられることを願う。同時に、今後は災害研究におけるケアの方法論的なオリジナリティや成果のあり方を、他の隣接領域の議論と区別しながらより明確に示すことが求められるだろう。

謝 辞

本論考は、京都大学防災研究所 令和6年度共同研究 萌芽的共同研究「日常と災害のあいだにおけるケアの理念と実践に関する多元性の探求」（研究代表者：土田亮、所内代表者：中野元太、2024年4月-2025年3月）の成果である。また、お忙しいなか発散的であった草稿に目を通していただき、建設的かつケアとウィットにあふれる対話に応じてくださった松田曜子さん、ケア概念の的確な整理にご助力いただいた望月美希さん、ライマンの書籍の紹介や本論考のポイントを示していただいた高森順子さん、実践的なケアのあり方について示唆的なヒントを与えてく

れる日本災害復興学会 2024年度研究会活動助成による災害復興とケアの研究会のみなさんに、ここに感謝の意を表す。

参考文献

- 阿部巧 (2014) : 専門家でない支援者が地域を変える, 稲垣文彦・小田切徳美 (編) 震災復興が語る農山村再生: 地域づくりの本質, コモンズ, pp. 227-235.
- 板倉由紀 (2018) : 災害・支援・ケアの社会学: 地域保健とジェンダーの視点から, 生活書院.
- 伊藤亜紗 (2020) : 手の倫理, 講談社.
- 上野千鶴子 (2011) : ケアの社会学: 当事者主権の福祉社会へ, 太田出版.
- 浮ヶ谷幸代 (編) (2015) : 苦悩とケアの人類学: サファリングは創造性の源泉になりうるか?, 世界思想社.
- 内尾太一 (2018) : 復興と尊厳: 震災後を生きる南三陸町の軌跡, 東京大学出版会.
- エリクソン, K. T. (2021) : そこにすべてがあった: バッファロー・クリーク洪水と集合的トラウマの社会学, 宮前良平・大門大朗・高原耕平 (訳) 夕書房.
- オレム, D. E. (2005) : オレム看護論 看護実践における基本概念 第4版, 小野寺杜紀 (訳), 医学書院.
- 木村周平 (2019) : 津波のあとで, 終わりの手前で: 津波被災地域のケアと家, 森明子 (編) ケアが生まれる場: 他者とともに生きる社会のために, ナカニシヤ出版, pp. 130-148.
- ギリガン, C. (2022) : もうひとつの声で: 心理学の理論とケアの倫理, 川本隆史・山辺恵理子・米典子 (訳) 風行社.
- クリフォード, J. & ジョージ, M. (編) (1996) : 文化を書く, 春日直樹, 足羽與志子, 橋本和也, 多和田裕司, 西川麦子, 和邇悦子 (訳) 紀伊國屋書店.
- グレーバー, D. (2016) : 負債論: 貨幣と暴力の5000年, 酒井隆史 (監訳) 高祖岩三郎・佐々木夏子 (訳), 以文社.
- ザック, N. (2020) : 災害の倫理: 災害時の自助・共助・公助を考える, 高橋隆雄 (監訳) 阪本真由美・北川夏樹 (訳) 勁草書房.
- ソルニット, R. (2010) : 災害ユートピア: なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか, 高月園子 (訳), 亜紀書房.
- 成元哲・牛島佳代 (2023) : 集合的トラウマとしての原発事故: トラウマを抱えたコミュニティを回復の共同体に, 成元哲・牛島佳代 (編) 原発分断と修復的アプローチ: 福島原発事故が引き起こした分断をめぐる現状と課題, 東信堂, pp. 3-34.

- 大門大朗・宮前良平・高原耕平 (2020) : 集合的トラウマと災害復興に関する理論的検討: カイ・エリクソン『Everything in its Path』を読み返す, 日本災害復興学会論文集, Vol. 16, pp. 37-46.
- 大門大朗・渥美公秀 (2018) : 災害後の被災地における被災者と支援者の関係を考える: 2016年熊本地震における災害ボランティアセンターの事例から, 災害と共生, Vol. 2, No. 1, pp. 25-32.
- 土田亮 (2024) : ケアする災害復興に向けたモノとの関係性: 石川県七尾市中島町での民間災害ボランティア支援を通じて, 都市計画, No. 369, pp. 130-131.
- トロント, J. C. (2024) : モラル・バウンダリー: ケアの倫理と政治学, 杉本竜也 (訳) 勁草書房.
- 中野元太・矢守克也 (2021) : チェーンド・ビジュアル・エスノグラフィの展望: 防災アクションリサーチの多声的・多角的現実の表現, 質的心理学研究, No. 20, pp. S90-S96.
- 中村沙絵 (2025) : 縫い繕うケア, 西真如・有井晴香・森明子 (編) 心配と係り合いの人類学: この世界を繕い直すためのケアの理論と実践, ナカニシヤ出版, pp.21-38.
- 中村沙絵 (2024a) : 臨床の場のフィールドワーク, 大村敬一・中空萌 (編) フィールドワークと民族誌, NHK 出版, pp. 231-247.
- 中村沙絵 (2024b) : コーラ・ダイヤモンドの言葉が響くとき, 國學院雑誌, Vol. 125, No. 2, pp. 18-32.
- 西真如・有井晴香・森明子 (編) (2025) : 心配と係り合いの人類学: この世界を繕い直すためのケアの理論と実践 ナカニシヤ出版.
- 西智弘・藤岡聡子・横山太郎・守本陽一・森田洋之・井階友貴・村尾剛志・西上ありさ・出野紀子・石井麗子 (2020) : 社会的処方: 孤立という病を地域のつながりで治す方法, 学芸出版社.
- 西川勝 (2007) : ためらいの看護学: 臨床日誌から, 岩波書店.
- 西川愛海, 野嶋佐由美 (2016) : 「糖尿病患者の災害手帳〜今からできる備えを〜」を活用した教育的関わりのあるあり方, 高知女子大学看護学会誌, Vol. 42, No. 1, pp. 97-107.
- 西村高宏 (2023) : 震災に臨む: 被災地での〈哲学対話〉の記録, 大阪大学出版会.
- 仁平典宏 (2012) : <災間>の思考: 繰り返す3・11の日付のために, 赤坂憲雄・小熊英二 (編), 「辺境」から始まる東京/東北論, 明石書店, pp. 122-158.
- 松田曜子 (近刊) : ケアとしての避難, 自然災害科学.
- 三井さよ (2021) : ケアと支援と「社会」の発見: 個のむこうにあるもの 生活書院.
- 三井さよ (2018) : はじめてのケア論, 有斐閣.
- 宮本匠 (2024) : 「みんな」って誰?: 災間と過疎をのびのび生きる, 世界思想社.
- 宮本匠 (2015) : 災害復興における“めぐす”かかわりと“すごす”かかわり: 東日本大震災の復興曲線インタビューから, 質的心理学研究, No. 14, pp.6-18.
- 村上靖彦 (2025) : 傷つきやすさと傷つけやすさ: ケアと生きるスペースをめぐる男性研究者が考えたこと, KADOKAWA.
- モル, A. (2020) : ケアのロジック, 浜田明範・田口陽子 (訳) 水声社.
- 望月美希 (近刊) : 災害がもたらす生活問題と被災者ケア: 東日本大震災後の宮城県沿岸部農村における事例から, 村落社会研究ジャーナル.
- 森明子 (編) (2019) : ケアが生まれる場: 他者とともに生きる社会のために, ナカニシヤ出版.
- 山根純佳・平山亮 (2025) : ケアする私の「しんどい」はどこからくるのか: 見えないケア責任を語る言葉を紡ぐために, 勁草書房.
- 頼政良太 (2024) : 災害ボランティアの探究: アクション・リサーチによる実践研究, 関西学院大学出版会.
- 頼政良太 (2023) : ベースの支援に根差した災害時の多様な活動を生み出す〈場〉についての研究: 一般社団法人おもやいの活動から, 災害と共生, Vol.7, No.1, pp. 1-15.
- ライマン, M. (2024) : 痛み, 人間のすべてにつながる: 新しい疼痛の科学を知る 12章, 潮崎香織 (訳) みすず書房.
- ラファエル, B. (1989) : 災害の襲うとき: カタストロフィの精神医学, 石丸正 (訳) みすず書房.
- レイニンガー, M. M. (1995) : レイニンガー看護論 文化ケアの多様性と普遍性, 稲岡文昭 (監訳), 石井邦子・サチコ・クラウス・筒井真優美・渡辺久美子 (訳) 医学書院.
- 鷺田清一 (2014) : <弱さ>の力: ホスピタブルな光景, 講談社学術文庫.
- 鷺田清一 (2015) : <聴く>ことの力: 臨床哲学試論, ちくま学芸文庫.
- ワトソン, J. (2014) : ワトソン看護論 ヒューマンケアリングの科学 第2版, 稲岡文昭・稲岡光子・戸村道子 (訳), 医学書院.
- Azuma, S. (2025): Living with shaking: Tangled connection, repairing care, and truth-telling of survivor-supporters in Noto Peninsula Earthquake recovery, Master's Thesis of Wakayama University, Japan.
- Kleinman, A. (2009): Caregiving: The odyssey of becoming more human, *The Lancet*, Vol. 373, Issue. 9660, pp. 292-293.

Stevenson, L. (2014): *Life Beside Itself: Imagining Care in the Canadian Arctic*, University of California Press, USA.

Thelen, T. (2015): *Care as social organization: Creating,*

maintaining and dissolving significant relations, Anthropological Theory, Vol. 15, No. 4, pp.497-515.

(論文受理日 : 2025年8月29日)